



## 平家岳1441.5m ハイキング

井上の山荘、HaksanView(2012/8/17—8/19)をベースに日帰り登山をやるというのがACKUの例会山行の一つのパターンとなっている。今回は番外で老師、平井一正先生をお招きしてバーベキュー・パーティと平家岳1441.5mハイキングを実施した。



写真：源氏岳1425m頂上付近から見た 井岸山1410m(左)と平家岳1441.5m

### メンバー

平井一正 緒方俊治(L) 和光広典 居谷千春 井上達男

### 登頂ピーク

753	井岸山	1410m	2012/8/18	12:18	居谷	井上
754	平家岳	1441.5m	2012/8/18	12:31	居谷	井上
755	小平家岳(源氏岳)	1425m	2012/8/18	13:19	平井 緒方 和光	/ 井上

注記: ピークに付けた番号は井上の生涯千山登山のID。今回で755座に達した。

### 日程

2012/8/17 HaksanView集合 バ - ベキュ -

2012/8/18 平家岳1441.5m 登山

2012/8/19 午前解散



### 行動記録 2012年8月18日(土)

#### 7:39 HaksanView 出発

昨夜、井上山荘の庭でのBBQ(バ-ベキュ-)は焚き火を囲んで深夜まで続いた。雨模様だったがシートを張ってその下での宴会が楽しく、ついつい多く飲みすぎたようだ。朝食を済ませて出発準備が整ったのは7時半だった。アプロ-チは明野高原のHaksanView(井上山荘)から一旦白鳥に下って国道158号を油阪峠越えて九頭竜ダムへ。箱ヶ瀬橋、面谷橋を渡って面谷に入った。



2012/8/18 7:39AM HaksanView出発



8:19AM 九頭竜湖の橋を左岸に渡る



ボタ山が現れた



8:35AM 面谷鉾山跡を通過



墓地が残されている



8:40AM 出発

#### 8:40 面谷鉾山跡 710m Parking 出発

鉾山跡の上手で砂防堰堤の工事をしていて道が挟られていたので登山口まで車を進めることは出来なかった。墓場の上手に駐車して出発。面谷鉾山の歴史については Internet の記事を添付したので参考にしてもらいたいが、銅の価格の下落と共に衰退し、追い討ちをかけるように 1918 年にスペイン風邪に襲われて多数の死者(90 人以上)を出し、ついには廃村となったとある。今も残されている墓地には怨霊が彷徨しているようにも思える。



砂防堰堤の工事中 (墓地の上手)



登山口付近で見つけたイチゴ

8:51 登山口 736m

9:23-9:33 938m 休憩

登山口から面谷の本流右岸を少し遡ると二股に出会う。水枯れした沢を渡って枝尾根に取り付くと急登が待っていた。背中から夏の強烈な太陽が照りつける。微風すら無き登りはゆっくり歩くがきつい。80歳の平井一正先生には過酷な出発となった。全身から汗が流れ落ちる中、大杉の少し下方で休憩。



8:51 登山口 駐車スペースもある



老師、元気に出発(登山口)



9:01 小沢を渡って急坂の枝尾根に取り付く



9:23 938m にて休憩、暑い



9:50 大杉を通過



大杉は 1043m で少し涼しくなってくる

**10:25-10:38 1177m 休憩**

井上はイタリア製の登山靴の左つま先ソールが剥がれた。早速靴紐をうまく巻きつけて応急手当した。それでもソールと靴の本体が滑って歩きにくい。(下山途中には右の靴も同様に底がはがれた。)

稜線に現れる第一鉄塔(PT-1)の少し下方にて休憩する。水分と甘いタルトにてエネルギー補給。

空には段々積雲が発達し始めた。そこで「今日は午前中が勝負、ここ二、三日の夕立が今日も来る予想が立つ」との思いが芽生えていた。

**11:40-11:57 源氏岳巻き道 1396m 休憩・昼食**

第二、第三の鉄塔が続くがだんだん傾斜が緩んで第四の鉄塔に至る。そこは 1425m ピークの額だった。第三の鉄塔は二本立っている所以他と識別し易い。右手の日ノ谷を挟んで対岸に平家岳 1441.5m がどっしりと座っている。直線で 870m の距離にあると GPS が表示している。老師は「わしゃここで止める」と限界を見極めたご発言。取り巻きの大勢は平家岳を諦める提案に賛同。背にしている 1425m ピークもどっしりした形の良い山だ。誰かが「あっちが平家ならこっちは源氏だ」と言い出したら皆が「そうだ源氏岳としよう」と勝手に山名を付けてしまった。下山後 Internet で調べてみると小平家岳と呼んでいるようだが、源氏岳の方がしっくりする。

ここで昼食とする。涼子(井上夫人)の炊いてくれたご飯を使って旦那が八重ちゃん(和光夫人)梅干を



入れたオニギリとしたものが今日の行動食。海苔で包んでいただいた。あれこれ持参した食べ物を口にして昼食を楽しんだ。和光が差し入れてくれた梅酒には八重ちゃん梅酒のレッテルが貼ってあった。和光家の自家製である。

このたびの会には和光は梅干、梅酒にとても美味しいトマト、さらに和光錦のお米まで持参してくれた。老師からはチ - ズとウニのつまみにワインが一本。緒方、居谷からはウイスキーとコニャックの差し入れがあった。二夜では飲みきれず、食べきれず、でした。次回の例会に廻します。

ゴロゴロと頭上で積雲が独り言を言い出した。が、井上は予てから登りたい山の一つとして平家岳をリステイングしていたのでここで引き返すのには心苦しい。そこで緒方リーダーに別動隊を申請、居谷を誘って平家岳に足を伸ばすこととした。他の三人は名づけたばかりの源氏岳に登って先に下山することになった。

### 12:18 753 井岸山 1410m

源氏岳から一旦 1320m まで高度を下げて再び登ると井岸山に至る。最低コルの少し先で送電線の巡視路を左に分けて登山道は稜線通しに切り開かれている。雲行きが怪しくなってきた。雷もゴロゴロの頻度が高まった。



井岸山 1400m と書かれた標識と三角点  
地形図には 1410m の等高線がある。



井岸山の山頂を平家岳 1441.5m に急ぐ居谷

### 12:31-12:35 754 平家岳 1441.5m 雷、降雨

井岸山から一旦 20m ほど下って、いよいよ平家岳への最後の登りとなる。笹原で樹木がほとんど無い頂上稜線だから雷が怖い。急いで三角点を目指した。頂上での長居は無用。パラパラと雨も降ってきた。居谷と二人並んでタイマーにて写真を撮ったら早速下山に掛かる。いきなりドカンと近い落雷に見舞われた。雨も激しくなった。雷さんがサッサと下れとおっしゃっているようだ。井岸山を越してコルに下る頃には一旦日差しも出てきた。源氏岳を越えると後はひたすら下るだけなので、それまで雷さんには一休みしていただきたいと念じたのが聞き入れられたのか、源氏岳の藪漕ぎが終わるまで空は静かだった。

### 13:19 755 源氏岳 1425m

井上は生涯千山登山をライフワークにしているので折角命名された立派な源氏岳をやり過ごすわけには行かない。井岸山の下りで右の靴底も剥れて歩きにくいのだが、平井先生たちの登ったル - トの



藪に突っ込んだ。頂上には直ぐに到達したが、引き返すのは面倒とばかりに PT-4 の鉄塔目指して藪漕ぎ。鉄塔では居谷が待ってくれていた。靴の調子が悪いのを心配してくれたようだが、源氏岳まで足を延ばしてきたことを知って、それからは井上の遅れは気にせずにサッサと下っていった。

源氏岳を背にした頃から雷さんが騒がしくなった。雨も再び降り出した。少し下れば雷も少し下ってきて稲光と雷鳴を轟かせる。これを繰り返しながらの下山だったが、主稜線から外れて面谷へ下る急坂に入った頃には雷は遠くなっていた。空一面に雲が広がり小雨となった。

**14:29 14:35 休憩 9 6 0 m**

**15:02 登山口**

しょぼしょぼと本格的な雨になった。午前中の晴天は天が我々に恵んでくれたものでした。感謝! 関西では雷に打たれて死亡された方もあった。我々を無事に下山させてくれた雷さんにも感謝!

**15:12 面谷鉾山跡 710m Parking 下山**

先に下山した連中に 30 分遅れでの下山だった。お待たせしました。

この暑い盆過ぎには登山者は他にいない。我々だけの静かな山だった。帰路、高鷲の湯の平温泉で汗を流して、今晚の HaksanView 宴会に備えた。

(以上 井上達男記)



\*\*\*\*\*

おもだに  
面谷鉱山について

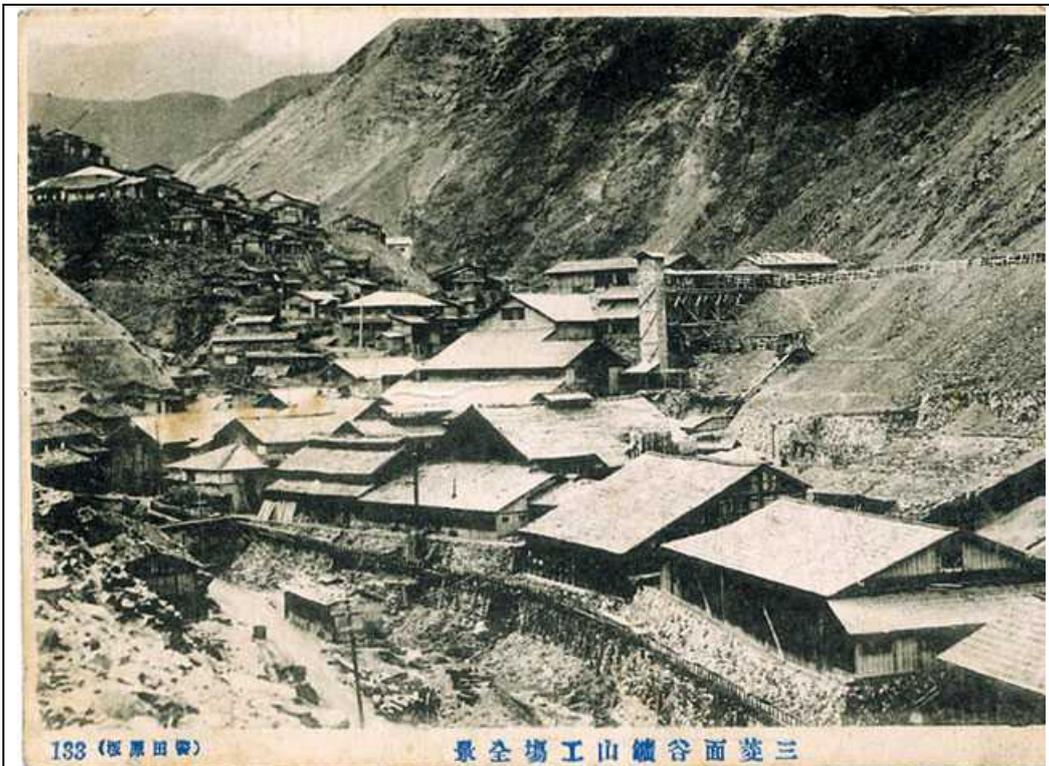
<http://jigyo.h-onoya.co.jp/archives/718>

今は誰も住んでいない大野市和泉地区面谷。約 100 年前、600 戸、3,000 人が山間の急峻な地に暮らしていた。当時、奥越の中心であった大野町にさえ電気が無かった頃、すでに自家発電が行われ、電話や電信も開通していた。

九頭竜湖にかかる箱ヶ瀬橋を右折して暫らくすると面谷橋が見えてくる。この橋を左折し、山道をさらに数キロ走るとボタ山や集落・工場跡が現れる。かつて土井氏大野藩の財政健全化に大きな役割を果たし、三菱合資会社(現、三菱マテリアル株式会社)が経営していた明治 21 年から大正 11 年まで日本有数の大規模鉱山として名を馳せた面谷鉱山である。

**【発見～江戸時代】**

面谷鉱山の発見には 2 つの説があり、平安時代中期(1058～1064 年)に既に発掘されていた説と、室町時代前期(1342～1345 年)に清兵衛という猟師が山頂で露出した銅を発見してからという説がある。その後、隆盛と没落を繰り返し、天保 3 年(1832 年)より、土井氏大野藩が直接経営することとなった。大野藩は幕府より開坑資金として 3 万両(現在の価格で約 12 億円)を借り、銅山用掛頭取を置いて坑道の開削を進めた。天保 10 年(1839 年)に、大野藩主土井利忠が内山七郎右衛門良休を銅山用掛頭取として面谷の経営に注力した結果、経営が改善され、銅の産出は急増。天保 11 年にはこれまでに最高の産出量となり、幕府に対する負債を予定より早く完済することができ、大野藩の財政建て直しに大いに貢献した。



133 (板原田製)

景全場工山礦谷面菱三

**【明治時代～大正時代～閉山】**

明治 4 年(1871 年)、村民と滋賀県の杉村次郎が共同で鉱業社を設立し、政府からの請負として採掘を始め、明治 14 年(1881 年)秋田弥左衛門が継承し、大野に選鉱所を建設、年間約 9000 トンを産出していた。明治 21 年(1888 年)三菱合資会社が継承。本格的な近代鉱山の経営が開始される。三菱時代の中でも明治 22 年(1889 年)から大正 6 年(1917 年)頃までが全盛時代であり、最盛期には 600 戸、3000 人が山間の急峻な地に住んでいた。



奥越の中心であった大野町にさえ電気が無かった頃、既に面谷川の流れを利用した自家発電が行われ、電話や電信も早くから開通して、その町並みは「穴馬銀座」と呼ばれた。面谷鉱山は主に銅を産出していたが、亜鉛や石英等の鉱物も産出していた。産出量においては大正6年(1917年)の年産32950トンが最高である。

そんな景気最盛期から面谷が斜陽に差し掛かっていた大正7年(1918年)10月、スペインで発生した新型インフルエンザが襲来した。鉱山の劇場で家族の慰安会が催され、診療所の医院長が村民に注意を促した矢先の同月中旬から11月にわたって全村民が罹患した。流行が始まって僅か1ヶ月余りの間に90名以上の村民が死亡し、熟練工を多数失った鉱山は一時休止に追い込まれてしまう。その後再開するが、第一次世界大戦後の銅需要の減少と安価な輸入銅に押されて採算が取れなくなり、ついに大正11年(1922年)9月、完全閉山となった。

(出典・引用文献)「白山の金山」(大野市歴史博物館発行)、「奥越史料第22号」(大野市教育委員会、大野市文化財保護委員会発行)、「面谷鉱山史」(尾崎龍夫著)、「郷土面谷」(面谷を偲ぶ会著)

### 面谷鉱山リポート

面谷鉱山は福井県大野市面谷にあり、九頭竜川上流の岐阜県境付近、標高約758メートルに位置している。工場跡、集落跡、鉱石くずなど当時の面影を感じさせる景観が広がっていた。

お問い合わせは、大野市観光協会まで TEL:0779-65-5521

\*\*\*\*\*

## HaksanView(井上山荘)でのバ - ベキュ -

平家岳 1441.5m 登山の前祝に焚き火を囲んで夕食を楽しんだ。その様子も報告に載せておきます。次回 156 回例会へのお誘いの意味も含めて。

2012年8月17日 金曜日

井上達男65歳誕生日

ACKU 平井一正 先生 緒方俊治 和光広典 居谷千春 がHaksanViewにやってくる。涼子と大和のPIOで食料の買出し後に郡上八幡の高速バス停留所に平井一正先生をピックアップに行く。京都発の濃飛バスは11:46 到着の予定が30分程遅れた。夏休みで名神高速が混雑していたようだ。バス停は炎天下で風もなく暑かった。

HaksanView到着後に平井先生を案内してひるが野廻りをした。残りの三人は和光広典君の車でやってきた。美人の湯に直行したのでそこにて合流。夕方はHaksanViewのWild GardenにてBBQ



Partyもこれぐらいの人数だとゆったりできる。



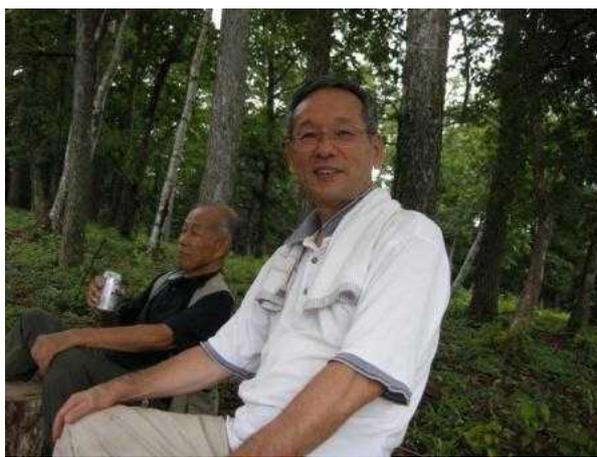
居谷千春 緒方俊治



老師 平井一正 先生



和光広典



井上達男



八重ちゃん梅酒



涼子さんも八重ちゃん梅酒を賞味



居谷千春さんは発想と物事の視点がユニークで話題豊富。

(以上 井上達男 記)